

# 会報

2002.12. 10

第 3 3 号

## 戦没船を記録する会

〒105-0014 東京都港区芝2-8-43 睦マンション206  
Tel:03-3452-5085 FAX:03-3452-2711 郵便振替001606-719515

## 目次

平和のための戦争展・横浜	1
海員組合大会でパネル展	1
奄美諸島の戦没船	2 - 3
埼玉の戦争展に参加	4 - 5
太平洋戦争後の戦争・紛争・兵器による船舶・船員の被害	6 - 8
収支報告・編集後記	8

## 平和のための戦争展・横浜

『2002 平和のための戦争展 IN よこはま みつめよう、語り合おう、戦争の過去といま』をテーマに、横浜の戦争展が8月9日～11日まで、横浜駅西口の「かながわサポートセンター」で開催された。



戦没船を記録する会も毎回参加し、会員有志が説明員として常時待機し、見学にみえた方の対応をした。また同時に「いま、平和のために伝えたい、アフガニスタン・パキスタン・横浜」というテーマで、現地から帰られたジャーナリストの方々のトークが開催され好評であった。その他ビデオ上映も毎日行なわれ、「劣化ウラン弾の恐怖」「横浜大空襲の記録」「女性国際戦犯法廷の記録」「米軍を迎えたヨコハマ」「闘う小国民」「教えられなかった戦争」「潜入・日吉台地下壕」等が上映された。

見学に訪れた市民は3日間で1600人、名前を記入せずに入場した人も2倍位いたので、約5千人が訪れたものと考えられる。

今年は何故か右翼の妨害も表向きはなく静かであったが、反対にNHKの後援が得られなかったのが痛かった。

参加者に感想文、アンケートの協力をお願いして、70名が記入してくれたが、その中に戦没船関連の感想文を紹介します。

『氷川丸の輸送によるガダルカナル島の傷病兵が、内地送還の途中、全員がサイパン島に置き去りにされ、帰ってこられなかったことを知り、戦争の酷さを知りました。37才女性』 (Y)

## 組合大会でパネル展

全日本海員組合の第63回定期全国大会が、東京・晴海のホテル・マリナーズコート東京で、11月5日から4日間開催され、次年度活動方針などが決定され、新役員が選出された。

戦没船を記録する会は運営委員会に要請して、2階の傍聴席入り口のスペースに展示場所を設置してもらい、パネル展示を行なった。展示品は今年新たに作成した「戦後の船舶・船員の戦争・紛争被害」の年表などを中心に、戦没船アルフォト写真その他を展示した。

また同時に追悼・浦田乾道刊行委員会が、追悼文・遺稿集「追悼・浦田乾道」と、記録する会の前常任理事の中原厚さんの詩集「一匹の黒い人魚の歌」を頒布した。(S)



# 奄美諸島の戦没船

北海道に住む船員OBの益山百合一さんが、故郷奄美大島在住の友人上田長吉さんに、奄美周辺の戦没船の記録の調査をお願いしたところ、手記や幾つかの資料を送ってくれたと、その資料を記録する会に送ってくれた。その幾つかを紹介します。

## 少年船員の思い出

ご依頼の件、教育委員会や町立図書館、それに南海日々新聞にかけ合って、ようやくまとめてみたが、思ったよりも数が多いのにびっくりしている。

奄美は地理的に本土と東南アジアの中間点にあり、また、古仁屋の港が絶好であったことから、当時は陸海軍の将兵であふれていたし、南方への中継基地として、船の出入りも多かった。当然、船の犠牲も多かったのだが、その頃は、軍人様々の時代で、それ以上に国のために働いた船員たちは、軽んじられて見向きもされなかった空気があった。

もちろん、軍人たちも常に死と隣り合わせの日々であったが、彼らは陸上勤務のものが多く、奄美駐屯の兵士たちはほとんど生き残った。それに比べて、輸送船の船乗り達は、常に海上を航行していたわけで、攻撃の犠牲になったのは数知れない。軍人以上に死を覚悟して国家に奉公したのだ。

戦後も、軍に関する書物やドラマや映画は無数に世に紹介されたが、アリウシャンや太平洋やインド洋で散っていった、多くの船乗り達を劇的に讃えたそれらを、見たことが無い。実に残念でならない。

ぼくは父が昔、船乗りであったから、幼少の頃からよく、インドネシアやフィリピン、南米のことを聞かされていたので、船乗りたちに尊敬の心情をもっていた。そして、その厳しさや苦しさや、楽しさも子供心に何となく理解していたように思う。

そんなわけで、父は軍人よりも船員達に対して、深い関心を持っていたし、小さな店をやっていたので、南方往来の船乗りたちが、時折訪ねて来て父と熱心に話しこんでいた。母も丁寧な接していた。

その中に江崎君という少年(15・6才?)がいた。ぼくが小学校2年生の頃であった。彼は岩手県のある寒村の出身で、貧しい農家の7人兄弟の長男。まだ軍人にはなれなかったから、高等小学校を出るとすぐ船乗りになったのだという。まだまだ、あどけなさの残る顔が幼なさを感じさせていた。

南太平洋のある島に行く途中、西吉見沖で潜水艦の魚雷にやられ船は沈没。乗組員の3分の1が死に、生き残って古仁屋の旅館に宿泊していた。

その間、彼は時折訪ねて来たのだが、岩手の両親が常に、国のために身を捨ててがんばれと言ってい

たということをお父さんから聞き、当時の船乗りたちの生きざまが、鮮やかによみがえってくるのだ。

彼はいつの間にか見えなくなったが、旅館の主人の話では、また別の輸送船にのせられて任務に就いたのだそうだが、その後の消息はわからない。太平洋のどこかで散っていったにちがいないと思う。

今度の調査で思ったのだが、時期から見て、表5の富士丸のクルーではなかったと想像している。それにしても、あれから60年たっているのに、その少年船乗りのことが、ぼくの脳裏からはなれない。

今も古仁屋の港には毎日船の出入りが絶えない。台風時には瀬戸内海峡には、数十隻の船が避難のため入港している。それらを見て、人は別に何も感じないだろう。しかし、ぼくは、大小様々な船に対して何とも言えない郷愁のようなものを感じるのだ。

時代は変わったが、ぼくの父の時代から今まで、世の中の表舞台でライトを浴びることも無く、黙々として海洋の上で、国を支えている船乗り達を忘れることはない。心から拍手をおくりたいと思う。

そしてぼくの同級生の中から船乗りになった君をほんとうに誇りに思っている。

## 加茂米

名瀬市史その他に「かも米」の記録が見える。

\* 久慈のA氏の記録 --昭和18年10月13日、台湾航路の加茂丸、西吉見灯台25海里で敵魚雷を受け、自力でようやく久慈港へ乗り上がるため、米無償で名瀬、宇検、瀬戸内地区へ配給。

\* 西吉見区長I氏記 --一戦時中南方からの輸送船約3千トンの加茂丸が米を満載して航行中敵の魚雷を受け、久慈湾に避難し米のほとんどを海中に浸した。幸い西吉見には漁船2隻と定期船1隻で思う存分その米を西吉見に運搬し、全戸に配り、お陰で食料苦から救われた。

\* 芝分館長K氏記 --日本の軍用船「カモ丸」が久慈湾付近で直撃を受けた。米は自由に放出されたので、芝もそれを入手し、味噌を作り食料としたので、その頃の食料難からいくぶん救われたものだった。その米の名を「カモ米」と名付けて戦時中の思い出の語り草になっていた。

\* 木慈区長F氏記 --篠川港に敵機に襲撃され、乗り上げた輸送船が積んでいたぬれ米の配給を受けた。

\* 島がたれ第6号 富島氏「我が町古仁屋青春回想録」 --昭和18年10月頃、台湾から帰国疎開する人々を乗せた貨物船加茂丸が、奄美近海で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、船首下部に被弾、浸水して急拠大島海峡の久慈湾に避難した。

幸いにも船員を始め、疎開者全員無事だったが、積荷の米や疎開者の衣類所持品、貴重装飾品が水浸しとなり、これらを水洗いして乾燥させ、元の容器に納める作業が必要であった。

米の陸揚げには一般住民も参加したが、疎開者の所持品の作業には古仁屋高等女学校の生徒が従事させられた。幸いにも天気は良く水洗い乾燥の作業は順調に終了した。

何故に高等女学校の生徒達を貴重品の水洗い、乾燥に従事させたかと言えば、引揚者たちの全財産がつまった積荷である。食料不足、物資不足の折り、世俗の垢に染まった一般住民を作業に加えると、紛失する貴重品が出るのではないかと危惧したのではないかとされている。

加茂丸の事故は災難とはいえ、大島海峡周辺の住民には幸せをもたらした。荷揚げされた濡れ米は各町村に配り、町村役場から各家庭に配給、各家庭では餅や味噌を造り、残りの米は水洗いして乾燥させて保存した。少し臭いがぜいたくは禁物で、米に勝る物は何もなく、みな大事にこれを利用した。

数日後、加茂丸は荷物を軽減して船首部の破口部分を水上に浮かせ、久慈湾を出港していった。(実際には応急修理に20日かかっている)

## グジグムイ

\* 宇検部落郷土史=グジグムイ(久慈米)の恩恵 --昭和19年(18年の誤り)11月南方から

米を満載して、日本本土へ航行中の加茂丸(約3千トン)は加計呂麻島近海で米潜水艦の魚雷を受けて、かろうじて西方村久慈湾に乗り上げて座礁した。

漁船金吉丸は、情報を聞いてすぐ久慈へ回航、海水に浸された米を船いっぱい積み込んできて、部落民に無償で配給して喜ばれた。また各人も夫々板付船をこいで名柄港へ渡り、けわしい山越えをして久慈へ行き、親戚すじを尋ね歩いて米を買い求め、それをテルいっぱい背負って、今来た急坂の山道をよじのぼって帰った。

宇検の人々はこの米をグジグムイといって大切に保管し、シンガイのアレとして、味噌造りの材料として、酒の醸造用として重宝がられた。

海水に浸かっていたのと、油も少し混入していたため、洗っても洗っても、独特の異臭が鼻をついたが、それどころではない、背に腹はかえられぬ食料難の時代であった。

## マ80船団の航海

昭和18年10月25日、基隆から門司に向った富士丸、加茂丸、鴨緑丸と護衛艦汐風のマ80船団は、27日0025、奄美大島西方110キロを航行中、加茂丸が船首に被雷した。本船の備砲で砲撃を行なったが、被雷で船首から沈下を始めたため、0140

総員退船が下命され救命艇で離船した。その30分後に沈下が止まったため乗組員が再び戻り、突貫作業で応急修理をして、単独で奄美大島に向かい、2230久慈湾に到り座礁した。(その後久慈湾で応急修理が施され、11月17日出港27日大阪到着入渠して本格修理がなされた)  
僚船の富士丸は0120より救命艇を降ろして、加茂丸の遭難者救助に当たり、暗闇の困難な中で生存者全員を救助したが、27日0620船尾と4番艙に被雷、浸水が激しく船尾より沈下し始めたため、全員退船となった後沈没した。護衛艦汐風と鴨緑丸は遭難者を救助して、28日門司に入港した。(この項戦時輸送船団史より要約) (篠原)

## 太平洋戦争中 奄美近海の戦没船調査

	艦・船名	トン数	沈没年月	沈没場所	原因	戦死者数
1	多喜丸(飯野海運)	1,243	17. 3. 4	奄美大島沖	被雷	22名
2	極洋丸(極洋捕鯨)	17,549	18. 9. 19	名瀬港沖	座礁	
3	丹後丸(日本郵船)	6,893	18. 9. 19	名瀬港沖	被雷	57名
4	江蕪丸(大阪商船)	3,179	18. 9. 19	名瀬北西	海難	
5	富士丸(日本郵船)	9,136	18.10.27	奄美大島西方	被雷	49名
6	敷設艇・区鳥	450	19. 4. 27	奄美大島	被雷	
7	富士丸(西太平洋漁)	7,089	19. 4. 29	徳之島東沖	被雷	3,703名
8	宮古丸(大阪商船)	970	19. 8. 5	徳之島伊仙崎沖	被雷	
9	給糧船 杵崎	920	20. 3. 1	久慈湾	空爆	289名
10	琉球丸(大阪商船)	731	20. 3. 1	古仁屋付近	空爆	
11	大信丸(関西汽船)	1,306	20. 3. 1	篠川・阿室釜沖	空爆	62名
12	弾薬輸送船・星丸		20. 3. 1	篠川・阿室釜沖	空爆	
13	呂宋丸(大阪商船)	1,679	20. 3. 1	名瀬港	空爆	204名
14	護国丸		20. 3. 16	喜界島上嘉鉄沖	空爆	
15	華頂山丸(三井商船)	2,427	20. 3. 23	奄美大島西方	空爆	60名
16	曾文丸	919	20. 3. 25	奄美一屋久島	被雷	
17	鳥海丸(大阪商船)	1,284	20. 3. 26	古仁屋付近	空爆	60名
18	大亜丸(大阪商船)	1,942	20. 3. 26	古仁屋付近	空爆	
19	海防艦 186号	740	20. 4. 2	瀬相模内	空爆	死200名 傷100名
20	1等輸送艦 17号	1,500	20. 4. 2	瀬相模内	空爆	
21	1等輸送艦 117号	1,500	20. 4. 2	瀬相模内	空爆	
22	新東丸(沢山汽船)	540	20. 4. 5	南西諸島近海	被雷	29名
23	駆潜艇 49号	440	20. 4. 7	南西諸島方面	空爆	
24	郵船丸	245	20. 4. 27	瀬相模内	空爆	
25	駆潜艇 58号	440	20. 5. 22	奄美大島	空爆	
26	B駆潜艇・富士丸	420	20. 6. 15	南西諸島	空爆	
27	駆潜艇 37号	440	20. 7. 27	奄美大島	空爆	

## 「平和のための埼玉の戦争展」に参加して

「2002 平和のための埼玉の戦争展」が、2002年7月25日から29日までの5日間さいたま市で開かれた。

本会(戦没船を記録する会)は、この「戦争展」に「持ち込みグループ」として参加した。

本会の参加は、一昨年から連続3回目の参加であるが、毎回同じ物の展示では能のないこととして、埼玉県在住の会員有志が「何か新しい企画はないか」と打合せ、「太平洋戦争では日本の造船所は殆ど攻撃されず、出来た船舶に軍人や物資を積んで出たところを攻撃されたようだがその辺の実態を表した展示を」「戦没軍人の半数以上が餓死・病死といわれているが、戦没船員の相当数も餓死・病死したのではないか、その辺の実態を調べて展示しては？」等の意見もあったが、今回は次の展示を行なった。

- 1、第2次世界大戦後の戦争・紛争・兵器よる船舶(日本人乗組)・船員の被害(別掲=内容簡略化したもの)(新企画)
- 2、徴用漁船の一端 --こんな小さな船までも(新企画)
- 3、対馬丸撃沈の大惨事
- 4、戦没者の多い戦没船
- 5、戦没船のアルフォト写真(54枚)
- 6、米軍記録に残る戦没船(攻撃を受けている日本商船の写真(10枚))
- 7、大久保画伯の「攻撃される日本商船」の絵(8枚)



展示会場全体の配置図は別掲の通りで、展示板は高さ2.2m×(両面延べ)約100mであったが、本会の持分は8mあった。

5日間の入場者は、15,000人とのことであったが、夏休み中とのこともあってか中・高生・家族連れの小中学生が多く、また老年の女性も多く見受けられた。

立ち止まって見て行く人が過去2回より多く、家族連れでは親たちが子供に話しているシーンが多く見受けられ、中高生は夏休みの研究課題の答えを捜し求める姿が見られた。

可故、戦闘員でない船員が軍人より死亡率が高かったのか？

何故、沈められることがわかっているのに出て行ったのか？

徴用漁船はどんなことをさせられたのか？

何故、日本には米軍のような戦闘写真がないのか？

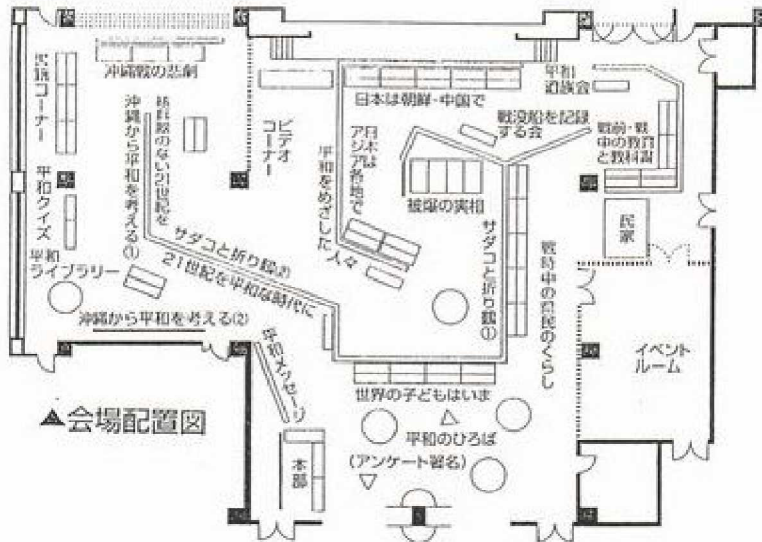
等の質問があった。

元船員だったという老人は「わしは3回も泳がされた(乗っていた船が沈められた)、そのたびに多くの仲間が死んだ。軍事物資輸送に成功したことは1度もない。沈められることがわかっていながら出て行く、全く馬鹿なことをしたもんだ、船員は犬死も同然だった」と吐き捨てるようにいていた。また「太平洋戦争終結後、日本は非戦争国であったが、船員は多くの戦禍に見舞われているのですね」と中年婦人はつぶやいていた。

埼玉県出身の船員は少なく、戦没船員も少ないためか、埼玉県では海運・船員に対する関心は低いようである。しかし、戦争展関係者は本会の戦争展参加もあってか、関心が高く相当の認識もしているようであるし、3年間で5万人程度の戦争展入場者があったので、一般の関心も少しは高まっているのではないかと期待したい。

埼玉の戦争展は今回で19回目を迎えたようであるが、半年前から準備を開始し、展示物自体の企画・作成のための会合・作業は勿論、戦争・平和関連の勉強会 諸集会等が多く持たれ、これらの多くの企画・実行に若い人たちが多く参加していることは注目に値する。

戦争の悲惨さを知ることは抜きには出来ないが、日本の戦前、今日の世界を見ると、今後の平和の維持・発展のための勉強と行動が必要との認識が



- それを促進すること。
- (d) 紛争の平和的な解決に向けて責任を負うこと。
- (e) 現代ならびに未来の世代が、開発と環境を享受できるように努力すること。
- (f) 発展の権利を尊重し、それを促進すること。
- (g) 女性および男性の平等の権利と機会均等を尊重し、それを促進すること。
- (h) 表現や意見、情報の自由に関するすべての人の権利を尊重し、その促進をすること。

高まり、若い人たちの発案で5回にわたり「ピース・セミナー」が開かれ、「日本はなぜ戦争をしたのか」「日本はアジアで何をしたか」「平和をめざした人々」「沖縄から見る日本・平和」「核兵器はなくせる」「21世紀を平和な時代に」がとりあげられた。

戦争の悲惨さを訴え、戦争に反対するだけでは、戦争も防げないし、平和も維持・発展させられない。全世界の人々の間に、国々の間に「平和の文化」を広め、定着させ実施することが世界の恒久平和を築くとの認識が強まってきている。

#### 註)「平和の文化」について

1986年(国際平和年)に心理学者・生物学者らが、進化論・遺伝学・動物行動学・大脳生理学・人類学などの成果に基づいて「人間のもって生まれた生物学的な性質の中には、戦争や暴力へと自動的に駆り立てる証拠はない」を主旨とする『セビリア声明』を発表した。

この声明の考え方を基盤に、1999年9月国連総会で「平和の文化に関する宣言」が決議された。

**第1条** 平和の文化とは次に掲げるような価値観、態度、行動の伝統や様式、あるいは生き方の一連のものである。

- (a) 教育や対話、協力を通して生命を尊重し、暴力を終わらせ、非暴力を促進し、実践すること。
- (b) 国連憲章と国際法の精神にのっとり、本来それぞれの国の国内法下にある諸事態には、その国の主権や領土の保全、ならびに政治的な独立の原理を十分に尊重すること。
- (c) 全ての人権と基本的な自由を十分に尊重し、

(i) 社会と国家のあらゆるレベルにおいて、自由、正義、民主主義、寛容、連帯、協力、多元主義、文化的多様性、対話、そして相互理解という原則を守ること。

そして、平和の文化は、平和に貢献する国内的そして国際的環境によって励まされること。

**第2条** 平和の文化は、個人、グループ、諸国民の中で平和の促進に貢献していく価値観、態度、行動様式と生き方を通じて、より十分に発達し続けていくのである。

(以下略)

そして、2000年を「平和の文化国際年」、2001年から2010年を「平和と非暴力の文化国際10年」と定め、1人ひとりの自覚と行動が必要として、2000年には「わたしの平和宣言」

- 1、私はすべてのいのちを尊敬します。
- 2、私は暴力を拒否します / つかいません / 許しません / なくします。
- 3、私はみんなとわかちあいます。
- 4、私は分るまで耳を傾けます。
- 5、私は地球環境を守ります。
- 6、私は連帯を再発見します / 再構築します。

の国際的な署名運動が開始され、全世界で7400万人、日本でも100万人以上が署名しているとのことである。

(2002年11月 栗原)

# 太平洋戦争後の戦争・紛争・兵器による船舶・船員の被害

## 1950. 6.25 ~ 1953. 7.27 朝鮮戦争

1950. 6.29 G H Q ( 連合軍総司令部 ) が「朝鮮、台湾に就航する船舶について、スト、サボ、妨害等輸送任務 ( 軍需品輸送及び軍用関係に限る ) を阻害し作戦に支障をきたすごとき行為一切を禁止し、違反者は厳重に処分する」との命令を発する。
- 7.17 L S T ( 戦車揚陸艦 ) Q 0 7 5 号 ( 2,319 総トン、日本人乗組 ) = 船内で米兵が発砲、2 人の船員が負傷・入院。
- 10.17 M S 1 4 ( 海上保安船艇 ) = 1 3 隻による掃海中、永興湾 ( 北鮮 ) 麗島灯台から 2 4 4 度 4,500m の地点で触雷・瞬時にして沈没、1 人死亡・1 8 人負傷。
- 10.27 M S 3 0 ( 海上保安庁掃海艇 ) = 掃海中群山 ( 韓国 ) 付近で座礁・沈没、人身被害なし。  
\* 船の触雷事故により 2 2 人の船員が死亡。
1951. 4. 八礼丸 ( 貨物船 ) = 軍事物資輸送中、門司港沖で米国船と衝突・沈没、死亡 1 名。
1953. 2. 4 第 1 大邦丸・2 大邦丸 ( 貨物船 ) = 韓国軍の銃撃を受け、1 名死亡。

## 1964. 8. 2 ~ 1973. 1.27 ベトナム戦争

- 1964.11. 3 L S T 1 1 7 号 ( 2,319 総トン、日本人乗組 4 3 人 ) = 南ベトナムのホイ・トリオン町の街中で外出中の乗組員 1 名が射殺される。
- 12.19 成華丸 ( 貨物船、1,599 総トン ) = メコン河 ( 南ベトナム ) 遡航中、対岸の戦闘による至近弾を受ける。人身被害なし。
1965. 1.11 進栄丸 ( 1,829 総トン、貨物船、3 0 人乗組 ) = メコン河 ( 南ベトナム ) 遡航中、陸岸より銃撃 1 発被弾、人身被害なし。
- 1.19 昭華丸 ( 1,599 総トン、貨物船 ) = メコン河下航中、陸岸より銃撃を受けるが人身被害なし。
1967. 4.20 L S T ( 2,319 総トン ) = サイゴン川支流ロンタオ川でベトコンの攻撃を受け、1 名死亡・4 名負傷。  
\* L S T 2 8 隻 1,500 人が食料・建設資材・兵員等の輸送に従事。

## 1973.10. 6 ~ 10.22 第 4 次中東戦争

- 1973.10.11 山城丸 ( 10,466 総トン、貨物船、乗組員 3 6 人 ) = ラタキア港 ( シリア ) において、イスラエル軍艦の砲撃を被弾、大破・炎上。全員退船・帰国。人身被害なし。同年 1 2 月廃船。

## 1980. 9.22 ~ 1988. 8.20 イラン・イラク戦争

1980. 9.22 かめりあ ( 17,040 総トン、油送船、乗組員 2 6 人 ) = シャトルアラブ川をバスラ向け航行中、イラン軍の銃弾 1 3 0 発を被弾、1 名軽傷。
- 9.24 からたち丸 ( 7,073 総トン、貨物船、乗組員 2 4 人 ) = シャトルアラブ川で航空機による銃撃を受ける。ホテルに避難・人身被害なし。  
\* 9・25 現在、ペルシャ湾在湾船舶 = 4 8 隻 ( 内日本籍船 8 隻 )
- 9.26 箱崎丸 ( 23,669 総トン、コンテナ船、乗組員 2 6 人 ) = ウムカスル港接岸中、陸上荷役設備にロケット弾 被弾、荷役不能、人身被害なし。
1984. 7. 5 PLIM ROSE ( リベリア籍船、276,424 重量トン、油送船、乗組員 2 6 人 ) = ラスタヌラからホルムズ海峡向け航行中飛行機によるロケット弾 2 発被弾、1 発はエンジンケーシングを貫通、不発だったが船体に 3 x 4 m の破孔、他の 1 発は 4 番左舷タンク甲板上に当たりバウンドして海中へ。人身被害なし。
- 9.13 ST TOVIUS ( リベリア籍船、油送船、250,500 トン、乗組員 xx 人 ) = 航空機のみ사일攻撃被弾。人身被害なし。  
\* 1984.6.1 ~ 12.31、攻撃を受けた民間船 3 3 隻、4 3 人死亡、1 7 人負傷。

1985. 2.18 AI MANAKH (クウェート籍船、32,534 総トン、コンテナ船、日本人乗組 25 人) = バーレンよりアブダビ向け航行中、UAE の北方 25°37'N、53°07'E でロケット弾 4 発被弾 (4 番甲板上のコンテナ、左舷船尾プロビジョンクレーン、右舷 2/0 居室付近、左舷 4 番船倉水線付近) A・B 甲板焼損、通信不能、応急操舵によりドバイ沖に自力で到着。1 人 (操機長) 死亡・1 人負傷。
9. 4 AL WATTYAH (クウェート籍船、24,300 総トン、コンテナ船、日本人船員 26 人) = ホルムズ海峡にてイラン海軍による臨時検査を受けた後拿捕、バンドルアバス港に連行されるが 9 月 17 日釈放される。
- 9.20 東豪丸 (23,286 総トン、コンテナ船、乗組員 27 人) = ホルムズ海峡入り口にてイラン海軍による臨時検査を受けた後拿捕、バンドルアバス港に連行されるが 9 月 30 日釈放される。
- \* 9.21 ~ 9.23 までのイラン海軍による臨時検査・拿捕 = 42 隻 (日本船 2 隻)
- \* ペルシャ湾内浮流機雷 = 83.07.08 ~ 09.05 の間に 16 個発見される。
- \* イラン・イラク戦争による船員の死亡 = 300 人以上 (日本人 2 人)
- 1986.11.18 CROWN HOPE (リベリア籍船、37,439 重量トン、プロダクト船、日本人乗組 6 人) = シュワイバ向け UAE 沿岸を南下中、イラン艦艇による尋問を受けた後、ガンボートによる銃・砲撃を受け、右舷船橋前水線上に被弾、機関室火災。人身被害なし。
1987. 1. 7 コスモジュピター (238,770 重量トン、油送船、乗組員 20 人) = ペルシャ湾内の 25°46'N、55°29'E の地点でイラン艦艇によるミサイル 1 発を左舷燃料タンクに被弾、船体貫通しポンプルームとの間の隔壁に突き刺さり止った。外板に 40cm の破孔、火災発生なし。自力でフジャイラ沖まで航行、応急修理後日本向け航行。人身被害なし。
5. 5 秀邦丸 (258,079 重量トン、油送船、乗組員 27 人) = ジュベルターナよりカフジ向け航行中、25°53'N、49°40.5' の地点で小型高速艇のロケット弾 8 発と機銃掃射、右舷機関室に被弾するも小損。自力でバーレンに至り修理後航行続行。人身被害なし。
- 5.27 PLIM ROSE (リベリア籍船、276,424 重量トン、油送船、乗組員 26 人) = クウェート沖 35 km (28°57'N、48°46.5'E) で触雷、人身被害なし。
9. 2 DIAMOND MARINE (リベリア籍船、237,298 重量トンタンカー、乗組員 24 人 (日本人 8 人)) = ラスタミラから日本向け航行中、ホルムズ海峡西方 26°21'N、56°06'E でイラン軍艦による銃・砲撃・船橋左舷下方など数箇所に被弾するも損傷軽微。付近海面にも砲弾・爆発あり。人身被害なし。
9. 2 日信丸 (180,200 重量トン、油送船、乗組員 21 人) = ジルク (UAE) より日本向け航行中、ペルシャ湾内 25°41'N、55°18'E でイラン武装ボートによるロケット弾 3 発被弾、右舷 3 番タンク・操舵室損傷、自力でフジャイラ港沖に到達、修理後航行続行、人身被害なし。
- 9.30 日晴丸 (236,426 重量トン、油送船、乗組員 27 人) = ラスタミラから日本向け航行中、ホルムズ海峡西約 55 km にてイラン武装ボートによる銃撃被弾、居室や救命ボートの 5 ~ 6 ヶ所に破孔、小火災発生するが鎮火、人身被害なし。
- 9.30 WESTERN CITY (リベリア籍船、236,426 重量トン、油送船、乗組員 26 人) = ダス島よりホルムズターミナル (イラン) 向け航行中、ホルムズ海峡西約 55 km にてイラン武装ボートによる銃・砲撃 10 発被弾、燃料タンクと居住区小損。人身被害なし。
- 11.11 L・B・EXPLORA (12,964 重量トン、油送船、乗組員 24 人 (日本人 2 人)) = アブダビよりジュベイル向け航行中、ドバイ (UAE) 北 55 km にてイラン武装ボートによるロケット弾 2 発被弾、2・3 番タンク小損、自力で航行続行。人身被害なし。
1988. 3.17 MARIA (2,846 総トン、LPG 船、乗組員 20 人 (日本人 1 人)) = ジュベイル (サウジアラビア) よりバンコック向け航行中、ドバイ沖でイランフリゲート艦のロケット弾 3 発・銃撃被弾、居住区火災、2・3 番タンク積荷ガス噴出、航海・通信機器大破、乗組員全員退船。UAE コーストガードに救助されるも、日本人 1 名死亡・韓国人 9 名負傷。
- 5.18 ACE CHEMMY (4,072 総トン、ケミカルタンカー、乗組員 17 人 (日本人 1 人)) = シンガポールよりジュベイル向け航行、ペルシャ湾入り直後イラン武装ボートのロケット弾 7 発被弾、エンジンルーム火災、自力航行不能。全員退船したがオマーン警備艇に救助される。人身被害なし。

## 航空機・潜水艦による被害

1954. 3. 1	第5福竜丸(140総トン、漁船、23人乗組) = ビキニ環礁付近で米国の水爆実験による放射能を全員が被爆。6月23日1名死亡、他の被爆者もその後多年にわたって闘病を強いられる。
1980. 7. 23	あいち丸(2,611総トン、自動車専用船) = 犬吠崎沖で自衛隊機の訓練用ミサイル破片(3kg)が船員居住区を直撃、機関室に達したが不発。人身被害なし。
1981. 4. 9	日昇丸(2,350総トン、貨物船、15人乗組) = 鹿児島沖で米原子力潜水艦に衝突され沈没、2人死亡。
1982. 1. 15	へっぐ(9,034重量トン、22人乗組(日本人7人)) = ミンダナオ島(フィリピン)東方で、フィリピン空軍の銃・砲撃を受け1人負傷。
1984. 3. 11	とよふじ5(4,176総トン、自動車運搬船、16人乗組) = 中国福建省沖で砲撃を受け、甲板に1.2mの大穴。人身被害なし。
1988. 7. 23	第1富士丸(154総トン、遊漁船、48人乗組) = 東京湾で、なだしお(日本潜水艦)と衝突、沈没、30名死亡。
1988. 8. 27	第8共和丸(412総トン、漁船、16人乗組) = カヤオ市(ペルー)沖でペルー潜水艦と衝突、潜水艦が沈没、日本人被害なし。
2001. 2. 9	えひめ丸(499総トン、水産高校実習船、35人乗組) = ハワイ・オアフ島南16kmで米原子力潜水艦グリーンビル(6,927排水トン)に衝突され沈没、9名死亡。 救助された者も長期間後遺症に悩まされた。

戦没船を記録する会埼玉班の2002年10月までの調べでは、太平洋戦争終結後の戦争・紛争・兵器・軍事訓練・核実験等による、日本人乗船の船舶および日本人乗員の被害は船舶39隻、死亡者49人、負傷者64人である。

今後も調査を進め、より詳細・正確を期すこととしているので、関係資料の提供をお願いする。

なお、展示用のパネルは、字数の制約上本表の内容部分を相当簡略化したものとした。

### 【編集後記】

\* 東京・晴海のホテルマリナーズコート東京に併設の「マリンミュージアム」が今年11月15日をもって閉館された。本会が98年の海の日を含む1週間、それ迄に収集したすべての戦没船アルフォト写真その他を展示した『在りし日の日本商船隊-98戦争で沈んだ船と人・東京展』を開催した場所であり、数少ない海や海員関係のミュージアムの1つがなくなることは誠に残念である。

\* 昨年2月米原潜グリーンビルに衝突され沈没した「えひめ丸」の事件は、33家族が委任する「県・被害者グループ弁護団」が11月14日に和解調印を済ませた。一方、米海軍の説明会開催(10月23日実現)とワドル元艦長の謝罪を求める2遺族の「えひめ丸被害者弁護団」の交渉で、12月15日にワドル元艦長が来日、宇和島市で遺族に直接謝罪することで、賠償交渉は最終段階を迎える。(篠原)

### 累計収支報告書

基本会計		2002年11月末日現在	
科目	入会金	繰越残高	
前年度繰越	150,000		
入会金			
合計	150,000	150,000	
一般会計			
科目	収入	支出	
会費	4,557,000		
賛助会費	1,720,000		
寄付金	3,290,297		
事業収入	2,240,342		
雑収入	571,504		
通信費		1,300,727	
会議費		300,872	
印刷費		1,306,724	
事業費		5,358,738	
交通費		560,075	
事務所費		2,080,000	
雑費		805,091	
繰越金		666,916	
合計	12,379,143	12,379,143	